小刻みアンケートシステムの活用事例における意義

Significance of Multiple Simple Questionnaire Management System in Case studies

小西　祥二　　中林　則孝
Shoji Konishi　Noritaka Nakabayashi
新城市教育委員会　津市立倭小学校
Shinshiro City Board of Education　Yamato Elementary School in Tsu City

＜あらまし＞　本研究では，学校評価の外部アンケートにおいて小刻み評価を活用することを目的とする．小刻みアンケートの実施により，適宜教育活動の改善を行うことができるとともに，学校広報による積極的なフィードバックに活用することが期待できる．

＜キーワード＞　学校評価　学校広報　小刻み評価　学校ウェブサイト　情報発信　信頼関係

1. はじめに

学校評価の義務化に伴い，保護者や地域を対象とした外部アンケートが各学校で実施されている．しかし，運用上の煩雑さから年度末に１度だけの実施が大半であり，かつ，１年を総括する抽象的な質問が多いため，対象者としてははっきりとした根拠や認識をもてないまま回答せざるを得えない状況を招きやすい．このため，回答自体も曖昧なものになりやすく，学校経営に対する有効な意見聴取とはなりにくいという課題がある．

本研究では，小刻み評価の手法により，ウェブを活用したアンケートを実施し，教育活動の改善を試み，実践事例について考察するものである．

2. アンケートの実施

一般に，アンケートの質問内容が具体的で，評価対象が明確であれば，回答に戸惑うことは少ないと考えられる．そこで，授業公開や学校行事などの場面で，参加対象者に直接調査実施すれば回答の正確さが確保されると考えた．

ただし，従前の紙媒体のアンケート方法では，実施後の集計に手間がかかってしまうので，以下の事例においては，ウェブ上のアンケートシステムで項目策定・回答入力・集計に至る全ての工程管理を行い，かかる手間と時間を大幅に軽減した．

2.1. 行事でのアンケート実施

新城市立舟着小学校では６学級において，授業参観，三世代活動，学校保健委員会，運動会の機会に参加保護者を対象にアンケートを実施した．

前年度までの回答傾向としては全体的かつ大まかな感想が多く，具体的な改善点が見出しにくかったので，本事例では，選択肢式回答で子どもや学校の具体的状況を質問した．また，共通質問項目を予め設定することで，たとえ，内容が異なる行事間であっても，差異・特徴をとらえ，改善効果の検証に活かすことを期待した．

本事例では，事後にパソコン室を開放し，ウェブ画面から回答する場所を設けるとともに，用紙による回答方法も選択できるようにした．パソコン室を利用して回答する保護者がほとんどであったため，操作上の問題は起こらなかった．用紙による回答を選んだ保護者は，パソコンが苦手という理由ではなく，学校での回答時間がとれず帰宅したケースであった．

回答集計はもっぱらシステム側で行われ，選択式回答で数値化された結果を視覚的に示すことができた．このため結果公表に要する作業を大幅に軽減することができた．

2.2. 卒業式と閉校式でのアンケート

年度末をもって閉校となる津市立太郎生小学校では，卒業式・閉校式において保護者を対象としたアンケートを実施した．

本事例では，アンケート回答方法として携帯電話を用いた．まず，卒業式での質問は，選択肢で「卒業式の点数は？」「校長挨拶は？」「子どもたちの態度は？」等を問い，併せて自由記述欄を設け感想を訊いた．

この結果，自由記述欄への書き込み者が多く，その文字数も多かった．これにより，保護者は携帯電話からの回答十分に対応でき，大半は入力にも問題がないことが示唆された．つまり，小刻みアンケートにおいて自由記述の設定は必ずしも

実施上の障壁にならないということである．

閉校式では，卒業式と同様の方法でアンケートを実施した．通常とは異なり，実施後結果公表までの時間が限られたため，翌日にアンケート回答を締め切り，２日後には結果と考察とを公表することができた．

2.3. 研修会でのアンケート利用

新城市教育委員会では，前事例と同様のシステムを利用して，教職員の職務別研修会で事後アンケートを実施した．

各研修会に「同じ質問」をすることで，個人の意識のみならず，職制による意識の違いが表れることを予想し，共通質問項目を用いて教頭・主幹教諭研修，教務校務主任研修，養護教諭研修，事務職員研修で調査実施した．また，アンケートでは「今後の研修に求めるもの」を問い，それを今後の計画に反映することで，参画意識を高めようとした．集計結果は，対象研修会の終了後ただちに公表することで，研修対象者の意識共有と認識の深化につながったといえる．

3. 学校広報と学校評価との結合

学校評価における外部アンケートでは，回答者が「学校の実態をよく把握していない」ために，回答に戸惑いを感じる事が少なくない．学校側としては，学校だよりをはじめとした学校広報を展開していても，それぞれは質問項目と明確に結びついたものとして提供されていなかった．

そこでウェブによるアンケートシステムの一部として，回答入力時に関連参照情報を提供する方法について活用検討を行った．

3.1. 根拠情報の参照機能

新城市立舟着小学校では，普段から学校日記（学校ブログ）にさまざまな教育活動を紹介しており，年間を通じて数百の記事蓄積を持つ．

そこで，学校評価に関する具体的質問内容に関して回答を求める際、回答入力画面に背景説明や関連記事へのリンクを付けた．

> 朝の会に「友だちの話」などを取り入れ，子供たちの発表する経験を増やしています．それを，調べことや観察したことをまとめ，発表する学習に活かしていこうとしています．

このように質問内容に関する根拠を具体的に示す事で，回答者による解釈のブレを抑制することができた．また，これまで十分に学校実態を知らなかった回答者に対して認識を深める機会を設けることになったといえる．

回答者にとって，とかく受け身になりがちな学校評価に関して，普段の日常的学校広報を元に学校経営的な視点を提供することができ，学校広報としても新たな付加価値が得られたといえる．

3.2 アンケート結果のフィードバック

学校広報は学校関係者との関係形成・維持こそが目的であるから，学校評価の外部アンケート結果についても，説明責任以上に「誠意ある回答を素早く行うこと」に意義がある．

小刻みアンケートシステムを用いることで，アンケート実施後短期間で結果公表できるので，回答者側は記憶の鮮明なうちに，他者の意見や全体の傾向を知り「評価する目」が鍛えられる．

また，自由記述欄等に記される不満や意見に関しても，学校側が謙虚に受け止め，説明や改善として真摯に対応することで，学校関係者側の認識に影響を与え，信頼関係を深めることにもつながると思われる．

4. 課題と展望

以上の通り，各事例において小刻みアンケートシステムを用いることで，運用管理とくに集計結果に関する手間の軽減，結果の即時フィードバックによる意識共有と信頼形成の効果，学校広報との結合による根拠情報の参照機能といった点に新たな意義を見出すことができる．

さらに，パソコン利用に加えて携帯電話による回答入力に対応することで，当初懸念された回答者側の操作的な課題についても，それほど障壁にならないことが示唆された．

しかし事例によっては，もともと紙媒体によるアンケート回収率がほぼ 100%であったのに，ウェブ利用で数%下回ったケースもあるので，実施環境についてはさらなる検討が必要である．

また，「小刻み」の意図する複数回の差異比較については，現時点では実践途上であるため，アンケートのねらいを明確にして，より効果的な活用を検討したいと考えている．